

Title	自性寺の大雅
Sub Title	Pictures of Taiga in Jisho temple
Author	菅沼, 貞三(Suganuma, Teizo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.110- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0110">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0110</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 自性寺の大雅

菅 沼 貞 三

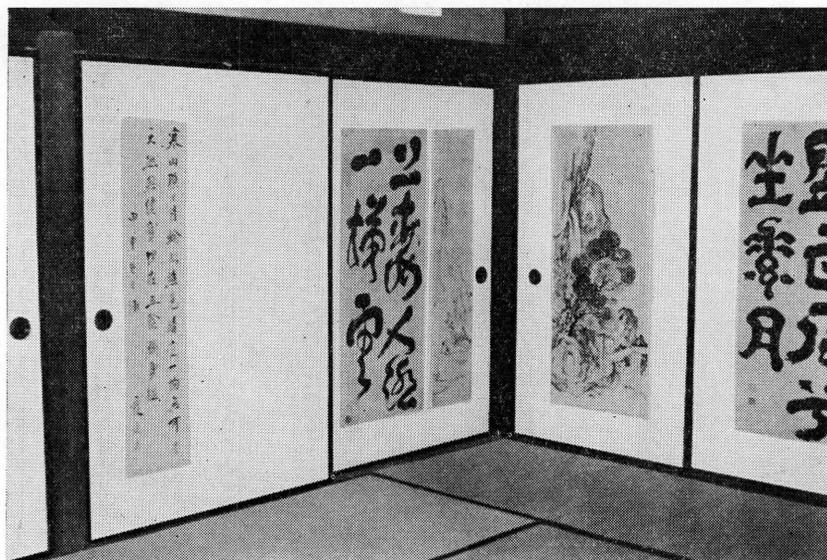
一

先師田中豊蔵先生がかつて「国華」に発表され、遺著「日本美術の研究」におさめている「大雅纂聞」のうちで、黄檗山万福寺と高野山遍照光院の大雅筆作の襖絵を論及されている箇所「自性寺（明和元年甲申四十二歳の作）は我その名を聞いて、実蹟に接せざれば、暫くこれを措く。」と書かれている。その自性寺の大雅作品の調査を企劃して、今年七月下旬に私は同様の諸君と共に、北九州一円の古美術をあわせ調査する旅に出た。その時の自性寺調査の概要を、ここに記しておこうと思うているが、とくに私どもが自性寺調査を思い立った動機は、先師の示唆によるところもあるが、大雅研究の基準となるべき作品をここに見出すために、探定したのである。先師の論及された万福寺も遍照光院も、ともに大雅の代表作として、世に喧伝されているのであるが、寺院の障壁の常として、年記も落款もこれを欠いているので、製作年代を確実に立証することができない。しかるに自性寺の襖貼付のものには、数種の落款印章を有し、うち一枚の書中には、年記が明記されているので、重要視したためである。

近年芸文研究の盛なるにつれて、わが国の絵画に関する図録の刊行や展覧会の開催が目につが、それらに接すると、まず作品の真偽の鑑別について、学術的に厳正なる検討のもとになされているや否やすこぶる疑問におもう。古画については、第一にその作品のもつ芸術的価値いかんを重視すべきは論をまたぬが、近世絵画においては、高名の画家であればあるほど、偽贋作がおびただしく介在しているので、その画家の芸術上の価値を正しく論評するために、まずその画家の真正正銘の作品を基礎としなければ、とんだ誤謬に陥ってしまう。それ故に近世絵画研究の第一に着手すべきは、作品の厳正なる真偽鑑別に存していると考ええる。大雅の遺作品についてもまた同様で、ことに大雅は偽贋作の多きこと、すでに化政年間において、竹田がその著「山中人饒舌」中に指摘しているごとくである。

自性寺にのこる大雅作品は、この点に関して、私どもにどのような解決を与えてくれるか、それを考慮しつつ調査を行ってきたのである。私個人としては、かつて昭和四年の夏に九州旅行の途、中津に立寄り自性寺をたずねたことがある。その時半日を費いやして同寺の書院内を巡覧して、一々の作品について覚書を取りながら、ただ従来の説に従って、大雅の筆作これなる哉と心のうちに刻みこんだままで、鑑別力も十分ならず、製作年代についての考慮もせずに、辞去して来たのであった。今回自性寺の住職河北一道氏の高配によって、審さに調査し撮影することができて、左に記すごとく所感をえたのである。

現存の自性寺書院の上ノ間、中ノ間の襖貼付の書画あわせて四十七点は、既にいわれていたことではあるが、まごうかたなき大雅の真筆であることを、私どももこの目でみて、確認したのである。しかもその中に淡焦の墨を駆使して、見事に描成した葡萄図のごとき、また墨描鮮やかに尖葉を渾灑した蘭と水仙図のごとき、実に秀抜な筆致に目を止めたのみか、上ノ間における画図のごときは、古人のいう逸筆飛墨をもって、超凡にして潤達なる画致を有するもので、これに配する題詩の大字の草書体の墨書は、みな墨痕淋漓として伸暢度のある筆路をもっている。これらに互して、無款の二条の水墨山水図は、ともに峻剛な山容を、自在暢達の筆致で描成したもので、画致また清潤の気がただようている。これらの書画ともに大雅の雅懐ある風韻に、じかに接する思を抱いたのである。上ノ間襖貼付の寒山詩の墨書中に「甲申冬日録」の干支記入のあることから、従来同寺の襖絵全体を甲申即ち明和元年（一七六四）、大雅四十二歳作とみなしてきたのである。この年は恰も同寺住職の禅恕、提州和尚が晉山について、大雅夫妻を伴って来寺し、夫妻は同寺に淹留



(上ノ間)

数十日間（もしくはは三年間）閑に乗じて渾灑したものと伝えられている。しかし私どものみるところでは、襖絵全体を同年作と認定することはむしろ否定的であり、大雅夫妻の来遊した証拠として、上ノ間脇床の袋戸棚の小襖の竹図を玉潤描くと伝えるが、異筆と思われこれまた否定的である。

私どもの調査の結果、自性寺の襖貼付の書画は全般的にみて、細かく分ければ五種別になるが、大別すれば凡そ三種類に分つことができる。まず上ノ間における画図、高士観月、海濤湧深、松下高士、濺瀑出峽、竹裡鼓絃などは、或は大自然の雄渾なる構成をもち、或は大気清幽のうち逸気従横なる筆格を示している。これらの落款をみるに、款記に「霞樵」、印記に白文方印（方一・九糧）「池無名印」（池字の偏は三点の三水）と白文方印方（一・九糧）「三岳道者」と朱文長方形印「前身相馬方九臯」の三顆を捺している。これらに対応する題詩の草書体は、悠然とした滋味ある筆路をもち、高雅の趣を帯している。これには款記なく、ただ朱文隸書体角印（豎三・三糧、横三・五糧）「池無名印」と白文隸書体角印（豎三・三糧、横三・五糧）「九霞山人」の二顆が捺してあるのみ。これら上ノ間の書画は、一聯をなすものとして、製作の期は略同一と考えられる。なお中ノ間の襖貼付中、徐文長の詩を書いた面には、前記の書と同寸同印の「池無名印」と「九霞山人」の外に前記の画図中にと同印の「前身相馬方九臯」を関防に用いている点から、



〔竹裡鼓絃〕

大体前記上ノ間の書とはほ期を一に準ずるものと考えられる。

次に上ノ間襖貼付中「甲申冬日録」の記入ある寒山詩は、中形の行書体になり、筆格が温潤である。款記に「霞樵者」その下に印文抹消して不明の印形（方二・二糧）を有する。これと中ノ間襖貼付中の拾得詩とがほぼ同一の行書体になり、款記は同じく「霞樵者」と署し、その下に印文抹消して不明の二印を有し、そのうち一印は、前記と同形同寸

法（方二・二糧）であり、関防に白文長方形「大雅」を用いている。なお中ノ間の無落款の「豊干对虎」図の題詩の書も亦その書体を等しくしている点に於て、この三者はほぼ同一の時期と推考される。而して前二者の印文不明の印形と同寸法の印を、余他の諸図中の印章と照合するに、中ノ間の画図の中、牡丹図、白梅図、蘭水仙図の各図は、ともに淡焦の墨を駆使して、布置を整えて、佳調ある画致をたたえている。各図中の款記は「霞樵」その下に白文方印（方一・九糧）「三岳道者」と白文方印（方二・二糧）「池無名印」（池字の偏隷書体の三水）が捺してある。この方二・二糧の白文方印「池無名印」を有する点において、前記「甲申冬日録」の記入ある寒山詩書などと、一聯をなすものかと思わる。これに準ずるものに、中ノ間の葡萄図がある。ただし款記の「霞樵」と白文方印「三岳道者」は前者と同様であるが、他に隷書体朱文角印（豎三・三糧、横三・五糧）「池無名印」を捺している。これに対応するのが、前記徐文長の詩書である点から、これらは「甲申」年記ある一聯の作品よりも、やや時を遅れるものであり、前記上ノ間の書画類とは、やや時を先ずるものと推考される。

第三は中ノ間襖貼付中、前記諸図に比すれば、蕭散の画致を有する「水亭釈氏」図は、款記に「無名」その署名中に、朱文方印「玉皇香案史」を鈐している。それと疎剛の墨筆で、戲画風に描破した一聯の図の中に、「施餓鬼」を描いたものは、款記に「三岳道者」、印記に白文連印「無名」「賃成」を有するもので、中ノ間襖貼付中の詩書の中に、「三岳道者」と署し、その下に白文連印「無名」「賃成」を有する二点の墨書とともに、ほぼ同時期に製成されたものかと思う。

竹田の「山中人饒舌」中に「池翁画数変、然大抵有三種、其一布置穩雅、步趨古人、署曰三岳道者、四十歳前後筆也。其一逸筆飛墨、如名士事了始歸三林下、葛巾野服行散自由、至蘭竹窠石、款題直用三画筆、字与花葉相聯綴、署曰霞樵、俱為晚筆也。」とあるが、この製作時の三区分をもって、本寺の諸書画類にあてて、製作時を推考すれば、まず款記に「三岳道者」と署し、印記に「無名」「賃成」の白文連印を有するものは、凡四十歳以前のもとし、「無名」と款し「玉皇香案史」の朱文方印を有するは、それらよりやや早期に属するものと推せられる。「甲申冬日録」の記入ある寒山詩書と同形同寸の印形をもつ、諸画図類はこれと同一とみて、明和元年大雅四十二歳の作と考究しても辻褄が合うと思う。そうして逸筆飛墨をもって、葛巾野服を着した高士を描出した上ノ間の諸図は、款記に「霞樵」と署し、白文方印「三岳道者」と白文方印「池無名印」と朱文長方形「前身相馬方九皐」の遊印とを有する点は、大雅の晩筆になるものと推考される。

伴蒿蹊がその著「近世畸人伝」の中で、大雅を評して「為人肅散、寵辱をもて心をおどろかさず、善く物と化して、苟も合し志を紆さず、外疎放にして内実修、人と交りて謙遜（損）し、しかもおもねらず、礼法に簡にして、往べくして往かず、答ふべくして答へず、是を義にかへりみれば、いまだかつて失ふところあらず、恵みて望まず、廉にしてやぶらず、其取予得失において恬如たり、平生行事多く人の不意に出づ、是に於て畸人の目あり。」とあるが、この心境の曠濶なること禪者の風格を思わせる。なお「近世畸人伝」には、次のごとく伝えている。「三歳初めて書を為す、五歳書を善くす、一日黄檗に至り、堂頭千呆禪師に謁し、席上大楷書をなす、禪師深く奇とし調を賜ひ、寺中の大衆もまた詩を賦して是を賞す」と。このように大雅は幼にし、この禪林に知られたのみか、長じてその方丈に唐土西湖の風光を画いて、大鵬和尚（十五世）の賞讃を博したこと、藤原家孝の「落栗物語」に記されているごとく、大雅と黄檗禪林との聯関は、書画の道において浅からざるものがあつた。当時の黄檗の禪風は、隠元以来の中国直伝の黄檗宗はすたれて、

ただ読経に際し吳音を以つてする外は、白隱の唱道にかかる臨濟禪を入れて、それが現時にまで伝えられてきているという。大雅においてその參禪弁道については、とくに白隱に師事したといわれている。

白隱は貞享二年（一六八五）十二月、駿河国原駅に生れ、十五歳同地松蔭寺で薙髮して慧鶴と称し、のち諸国を行脚して、信濃飯山に至り、正受老人より鉗鎚をうけ、享保二年（一七一七）三十三歳で松蔭寺に晋山した。翌年妙心寺第一座に転じて白隱と号した、そうして享保十一年（一七二六）歳四十二の秋七月、一夜法華経を読み、譬喩品に至り、虫声を聞いて豁然と大悟し、法華深甚の妙理に契当した。のち松蔭寺に僧堂を建てて、大衆に講説した。參集するもの時に七百人を超えたという。幾多の童象を出して、明和五年（一七六八）十二月八十四歳、松蔭寺で示寂した。臨濟の宗門において、大燈國師以来不出世の法器として、その聖名は天下に知れ渡っていた。「白隱慧鶴年譜」によれば、「宝暦元（一七五一）師六十七歳の春、岡山小林寺に赴き、帰路平安城を過ぎ世継氏に館す、池大雅來參す。」とあるように、大雅二十九歳の時、白隱に参じ、これ以後において白隱について弁道し、「耳豈得聞隻手響、耳能沒了尚存心、心能沒了尚難得、却識師恩不識深。」という偈を呈したと伝えられている。大雅の書画において、悠然として瀟灑な風韻を、帯びている所以は、彼が白隱に師事して得た、禪の真意が深く感していることもまた思ふべきである。本寺の諸画のうちに、超俗の高士を描き、寒山詩や禪林句集より拔萃して墨書しているは、禪寺院のためのものとはいえず、大雅の風懐に、白隱の禪風がひそみおることを、端的に示顯したものといえよう。

## 一一

ひるがえって、大雅の作品がいかにして、九州の一角、中津の自性寺に遺存しているか、その素因となるべきものを、探索してみると、まず自性寺には数幅の白隱の筆になる、書画類が遺存している。その中の一幅に、同寺開山梅心和尚の画像が介在している。画中の贊文の末節に「武臣梅田伝二撃真、踏入鶴林草蘆、展開面目嚴令、是阿誰自性開山正円正覚梅心宗鐵禪師大和尚。宝曆第七丁丑歲中春佳辰、現沙羅樹下炷香九拜書、白隱叟」と墨書している。これによれば梅田伝二（即ち豊前中津藩奥平家臣、梅田伝二左衛門）がお

そらく江戸下向か、もしくは帰藩に際し、道中の駿河国原駅の鶴林草廬（現松蔭寺）に白隠を尋ねて、奥平藩の菩提所である自性寺の当時の住職、祖山和尚の依頼によって、開山梅心和尚の画像の筆作を懇望したものが、宝暦七年二月に出来上ったことを、示すものである。祖山和尚の次の世代は、十二世提洲和尚である。提洲の閲歴は「近世禅林僧宝伝」上巻に左記のごと記載されている。（原文漢文）「師は伯州の人、天資穎敏で、学は内外を綜べ、外典はただ易において未だ通せず、因って江戸に行きて儒者につき、之を質さんと欲し、路に鶴林の門を歴るを以て、他の為に天下の大宗匠たり、因りて入って之に見ゆ。林曰く汝は固より何処に行くか、師曰く江戸、曰く何の為か、曰く某外典をよみ未だ易理を曉らず、將に儒について之を講習せんとす。林曰く易は之れ理と為すなり、苟くも見性の力なくば、則ち解く能わず、汝は且らく此間に留まり以て、見性を図るべし。汝見性せば我汝の為に易を講ぜん。師曰く唯命、此に於て挂搭し、孜々参究す、果して見性の大事を了せり。遂に之に服侍すること十余年、「荆叢毒藥」を編成し、のちに豊前自性寺に住し、大に炉鞴を開き後学を鍛錬し太厳に号命し凡そ衆に接するに、唯率の三関を以てす。未だいくばくもならずして、戦化、愚溪、行応、海門、芝山、松山輩は皆師の鉗鎚を受けたり。」とかくして自性寺は白隠門下の九州における、最初の道場となった。

伯耆国に生れた提洲が、豊前国中津の自性寺の住持となったのは、奥平藩社奉行であった梅田伝二左衛門あたりが、さきに自性寺開祖の画像を、白隠にその筆作を懇望したことから、自性寺住持祖山の後継者を、白隠に依頼したので、服侍すること十余年師の「荆叢毒藥」を編成した揚洲が師の推挙によって、本寺に迎えられたかとも想定される。なお「金剛山自性寺記録」（同寺蔵筆写本）によれば「第十二世提洲和尚は宝暦十四甲申歳（一七六四）十月、自性寺住職となり、明和二乙酉歳（一七六五）三月に転位した。安永四年、本堂を再建し、同七年（一七七八）五月八日に自性寺で遷化した。同年に客殿の晋請が完成した。」とある。

大雅と提洲との交宜は、同じく白隠の傘下にいたものとして、師を介しての交道かと推せられる。大雅が初めて富士山に登ったのは、寛延元年（一七四八）二十六歳の時に、江戸に遊び、その途中のことであった。のち宝暦十年（一七六〇）三十八歳の時に、高芙蓉、韓大年と共に、白山、立山、戸隠山、浅間山に上り、荒舟山及富士八級に至る。（兼葭堂襍録所収、大雅堂年譜による）翌十一年六月にも、富士に登り遠州秋葉山や三州蓬萊寺山に参詣したという。このように幾度かの富士登山の往路か、帰路において、大雅は山麓の原駅松蔭寺によって、白隠に参じその侍者提洲に遭う機会があったことと思われる。ことに前記白隠の「荆叢毒藥」を提洲が編成

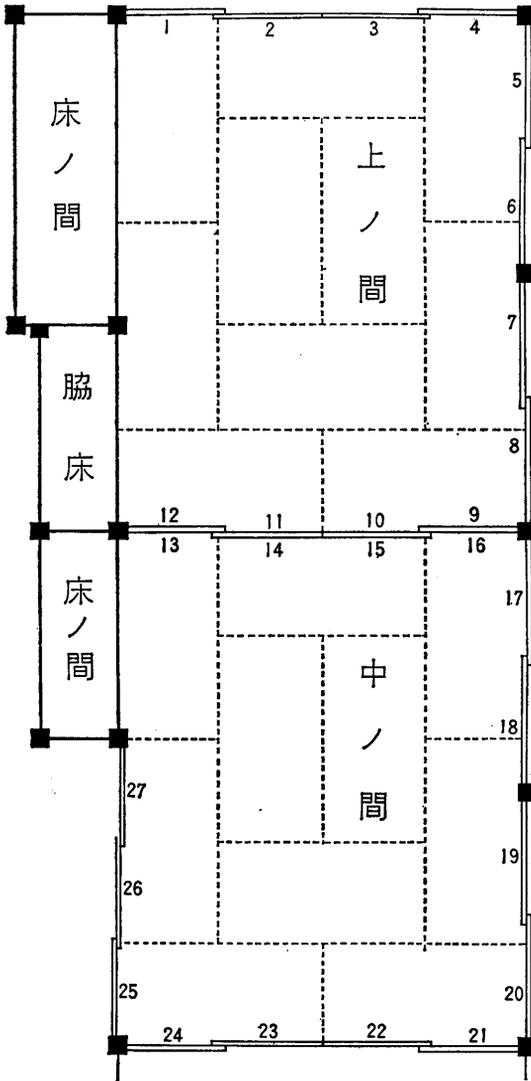
し刊行したのは、宝曆八戊寅年（一七五八）秋八月のことで、これの序文は明和六年己丑（一七六九）六月八日付の大雅の書をそのまま、木版におこしているので白隠提洲大雅の三者の交道を語るにふさわしいものと思われるが、自性寺の襖貼付の書画類は、それにもまして、密なる交道を示すものといえよう。なおこれに関する根本文献と目せられる、「提洲日記」六冊が自性寺に遺存している。この提洲日記の中から、大雅に関する記事と、同寺普請についての記事を拾い読みすれば、左のごとくである。

同日記中、大雅に関する記事は三ヶ所に見出される。第一は明和四丁亥年（一七六七）十一月七日、（大雅四十五歳）桑吉（京師）より大雅面来るとある。第二は明和六己丑年（一七六九）二月十一日、雲州永徳へ状出す、大雅扇二本遺すとある。そうして第三は明和七庚寅年（一七七〇）正月十七日、藩主奥平公が御仏参の砌、白隠の画種々と大雅の画とあわせて、提洲自身の画を御覧に入れたとある。これら三ヶ所の記事では、大雅作品の製作期を規定することにはならないが、自性寺襖貼付の書中に、甲申即明和元年（大雅四十二歳）の年記の書入時より、三年後において京の桑吉なるものから、大雅の画がもたらせ来るとあることは、自性寺の襖貼付の書画の全部は、少くとも、大雅の一時期（従来の甲申説）に限定し得るものでなく、それ以後において、京より同寺に届けられたことが知られる。なお本寺の建物の普請などについて、提洲日記の記事を検するに、明和四丁亥九月廿三日、仮僧堂成就とあり、同年十一月九日には普請始るとある。なお明和七庚寅年（一七七〇）五月三日、禅堂統足の地形とあり、同年同月七日、昼より雨、禅堂建かかる。夜大雨（中略）屋根葺、上人来る。七ツ迄に葺仕、などとある。そうして明和九壬辰（一七七二）十二月十五日「夕九ツ時殿町失火に際し、客殿庫裡戸障子はつす。」といふ記事がある。これは直接に普請とはかわりがないが、客殿の戸障子とあるのが目にとまる。また安永四乙未年（一七七五）に本堂再建、同年十二月二十三日入仏式とある。これまで提洲日記中、普請に関する記事はおわっているが、自性寺の現書院は安永七戊戌年に落成したと伝えられている。然るに同年五月には提洲和尚が遷化し、それより二年前の安永五丙申年四月十一日に大雅が五十四歳で歿した。上記したように、自性寺の普請は明和四年十一月より始められ、明和七年五月の禅堂、安永四年の本堂、と次々に建造され、安永七年に書院の落成をみたのであるが、すでに大雅なきあとであった。現にこの書院の襖貼付大雅筆作にかかる書画四十七点は、或は提洲の若きころ贈呈されたものであり、或は提洲の普山式を賀すために、或は新築の諸堂を裝飾するために、幾度かに亘って、京師より送り来ったものが、集大成されたものと推考されるのである。

最後にこれら自性寺に遺存する大雅作品を通観してみるに、遍照や黄檗などにのこる、雄渾の筆端になる大画面に比すべきものなく、また十便のごとく滋味あふるる佳品に互すべきものとはいいがたいが、大雅の或は三十年代、或は四十年代または晩年に至る間に亘って、法友提洲のために、無門の関を破り、おのれが胸襟を開いて語るかのように、自由瀟灑に揮毫し去ったところに、興趣の尽きぬものが存しており、且つ一部に年記を有し、大部分の書画に、正しき落款が伴っていることも、大雅研究にとって貴重なる史料といふことができる。(一九六二・九)

(書院平面図)

左記の調査記録は、同行の八代講師、中野助手、大学院の森山、高野、及び加藤諸君の協力によるものであり、挿図写真は森山君の労に負うところのものである。



調査記録

自性寺の書院は、東西にわたって十畳二間と四畳一間との三室よりなり、南側に茶室が設けられている。大雅の作品は、十畳の二間の襖と板戸、西側と北側に繞ぐる濡縁の兩戸の裏にも及んで、都合二十七面の中に、四十七点が貼付されているのである。いまその状態を書院二間（仮称上ノ間、中ノ間）の平面略図によって、番号を入れて示せば、左のごとくである。

上ノ間

(1) 高士観月図

淡彩 竪一三〇種、横五三種

款記「霞樵」

白文方印（方一・九種）「池無名印」（池字偏三点ノ三水）。白文方印（方一・九種）「三岳道者」。朱文長方形印「前身相馬方九阜」（遊印）

(2) 題詩

行書 竪二二九種、横五三種

「谿路烟開江月出」

無款。朱文角印（竪三・三種、横三・五種）「池無名印」。白文角印（竪三・三種、横三・五種）「九霞山人」。

(3) 題詩

行書 竪一三二種、横五二・四種

「草堂門掩海濤深」

朱文角印（②ト同寸）「池無名印」。白文角印（②ト同寸）「九霞山人」。

(4) 海濤涌深図

淡彩 竪一三〇・六種、横五二・三種

款記「霞樵」

A 深山深秀図

墨画 竪一三一・四種、横二八・二種

無款 無印

B 題詩

草書 竪一三一種、横五三種

「飲澗簾喧雙派水」

朱文角印（②ト同寸）「池無名印」。白文角印（②ト同寸）「九霞山人」

(6) A 松下高士図

淡彩 豎二二七・六種、橫五三種

款記「霞樵」、白文方印(①卜同寸)「三岳道者」。白文方印(①卜同寸)「池無名印」

B 寒山風光詩

草書 豎二二七・二種、橫二八・三種

「欲得安身處、寒山可長保、微風吹幽松、近聽声愈好、下有斑白人、喃喃說黃老、十年婦不得、忘却來時道」

無款、無印

(7) 寒山之月詩

行書 豎二二八・五種、橫二八・三種

「寒山頂上月輪孤、照見晴空一物無  
可貴天然無個宝、埋在五陰溺身軀  
甲申冬日錄

款記「霞樵者」、白文方印「印文不明」(方二・二種)

(8) A 題 詩

草書 豎二二九種、橫五三・二種

「上婁人踏一梯雲」

無款。朱文角印(②卜同寸)「池無名印」。白文角印(②卜同寸)

「九霞山人」

B 溪山吟行圖

水墨 豎二二九・四種、橫二八・二種

無款、無印

(9) 澗瀑出峽圖

淡彩 豎一三一一種、橫五三・二種

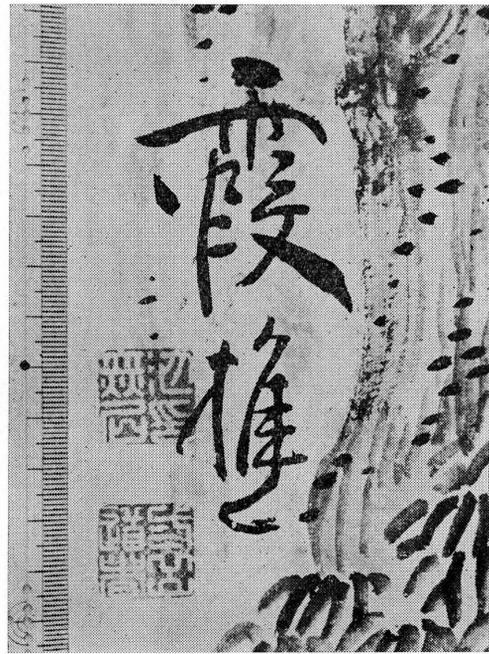
款記「霞樵」、白文方印(①卜同寸)「池無名印」。白文方印(①卜同寸)「三岳道者」。朱文長方形印「印文抹消」(遊印)

(10) 題 詩

隸書 豎二二九・一種 橫五三種

「盤白石兮坐素月」  
無款。朱文角印(②卜同寸)「池無名印」。白文角印(②卜同寸)「九霞山人」

(11) 竹裡鼓絃圖



淡彩 豎一三一・二糧、橫五三・二糧  
 款記「霞樵」、白文方印(①卜同寸)「池無名印」。白文方印(①卜同寸)「三岳道者」朱文長方形印「印文抹消」(遊印)  
 題 詩

隸書 豎一三〇・七糧、橫五三・三糧  
 「乘松風兮鼓瑤琴」

無款。朱文角印(②卜同寸)「池無名印」。  
 白文角印(②卜同寸)「九霞山人」

中ノ間

03 富貴国色図(牡丹)

墨画 豎一三二・七糧、橫五七・八糧

款記「霞樵」。白文方印(①卜同寸)「三岳道者」。白文方印(方二・二糧)「池無名印」

(池字偏隸書体三水)

04 A題 詩

草書 豎二二四・八糧、橫二八・五糧

「一口吸尽西江水」

無款 無印

B寒山詩

草書 豎二二五・三糧、橫二八・四糧

「世有多事人、広学諸知見、不識本真性、与道転懸遠、若能明真相、豈用陳虛願、一念了用心、開仏之知見。」

05 徐文長詩

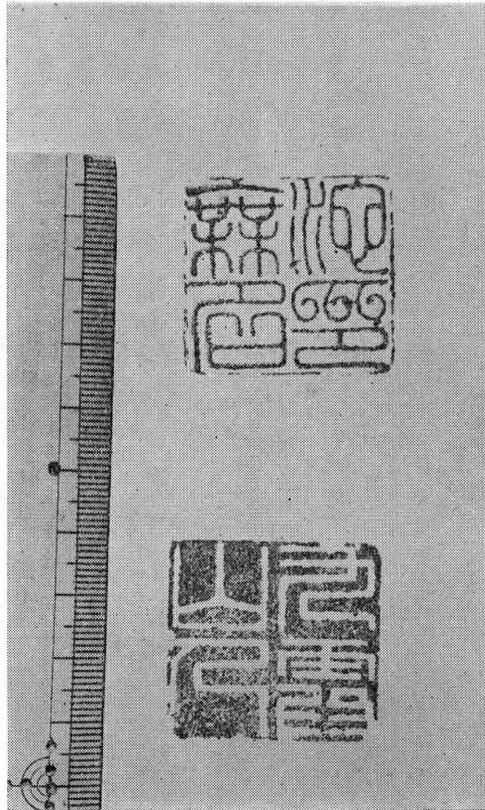
行書 豎一三三・四糧、橫五八・四糧

「絳幘籠頭五尺長、吹簫弄玉別成粧、不知何事秋如此、一道瑤天白鳳皇。」

無款、朱文角印(②卜同寸)「池無名印」。白文角印(②卜同寸)「九霞山人」。朱文長方形印「前身相馬方九章」。

06 A 猿狙把月圖

墨画 豎六二・五糧、橫二七・七糧。



無款 無印

B 江上村舍圖

墨画 竖五六・三横、横二七・六横。

無款、無印

C 題 詩

草書 竖一三〇横、横二八・五横

「古木枝柯少，枯來復幾春。露根堪繫馬，空腹定藏人。蠹食莓苔老，邊鏡霹靂新。若当江浦上，行客祭為神、」

款記「三岳道者書」白文連印「無名」「貨成」。

A 題 詩

草書 竖一三三・六横、横二八・七横

「溪路烟消江月出，草堂門掩海濤深」

款記「九霞」白文連印「無名」「貨成」

B 徐文長詩

草書 竖一三三・三横、横五八・二横

「陪齒孤芳压俗姿，不堪復写私雲枝。從來万事嫌高格，莫怪梅花着地垂。」

無款，朱文角印(②)同寸。「池無名印」。白文角印(②)同寸。「九霞山人」。朱文長方形印「前身相馬方九臯」。(関防)

蟾幹香雪圖(白梅)

墨画 竖一三三・七横、横五八・一横

款記「霞樵」、白文方印(①)同寸、「三岳道者」、白文方印(②)同寸、「池無名印」。

B 題 詩

行書 竖一二・九横、横二八・二横

「一条寒衲是生涯」

無款、無印

A 題 詩

行書 竖六四・六横、横二八・二横

「碧巖高沈月，寒雲靜鎖樓」

無款、無印

B 豐干对虎圖

墨画 竖六三横、横二八・二横

無款、無印

C 徐文長詩

草書 堅一三三・五種、橫五八・二種

「數串明珠桂水清，醉來將墨寫能成，當年何用相如璧，始換西秦十五城」

無款 朱文角印(②)卜同寸「池無名印」、白文角印(②)卜同寸「九霞山人」、朱文長方形印「前身相馬方九臯」(闕防)

20 A 醍醐紫房函(葡萄)

墨面 堅一三三種、橫五七・二種

款記、「霞樵」、白文方印(①)卜同寸「三岳道者」、朱文角印(②)卜同寸「池無名印」

B 題詩

行書 堅一二七・三種、橫二七・六種

「月在青天水在瓶」

無款、無印

21 A 柳宗元詩

草書 堅一三〇種、橫二八・二種

「驚風亂颭芙蓉水，密雨斜侵薛荔牆」

無款、無印

B 寒山詩

草書 堅一三〇・四種、橫二八・六種

「我見多智漢，終日用心神，岐路逢叟羅，欺慢一切人，唯作地獄滓，不修正直因，忽然無常至，定知亂紛紛」。

無款、無印

22 蘭仙同床函(蘭水仙)

墨面 堅一三三・三種、橫五七・八種

款記「霞樵」、白文方印(①)卜同寸「三岳道者」、白文方印(②)卜同寸「池無名印」

23 寒山詩

行書 堅一三三・二種、橫二八・二種

「井底紅塵生，高山起波浪，石女生石兒，龜毛寸々長，欲覓菩提路，但看此勝樣」

款記「霞樵者」、印文沫消二印、白文方長形印「大雅」(闕防)

B 題詩

草書 堅六五・五種、橫二八・四種

「鬪婁識尽喜何立、枯木竜吟銷未乾」、  
無款、無印

C 水亭积氏図

淡彩 竪六六・二種、横二八・九種

款記「無名」、朱文方印「玉皇香案史」

徐文長詩

草書 竪一三三・六種、横五八・四種

「自從生長到如今、烟火何曾着一分、湘水湘波接巫峽、肯從峯上作行雲」、

無款 朱文角印(②)同寸)「池無名印」、白文方印(②)同寸)「九霞山人」朱文長方形印「前身相馬方九臯」、(関防)

25) A 岩頭望月図

墨画 竪一九種、横六〇種

無款、無印

B 积迦、鬼図

墨画 竪二九種、横五五・四種

無款、無印

C 一望松丘図

墨画 竪二九種、横五九種

無款、無印

26) A 溪路雨行図

墨画 竪二八・二種、横五六・六種

無款、無印

B 施餓鬼図

墨画 竪二八・五種、横五九種

款記「三岳道者写意」、白文連印「無名」「貸成」

C 赤壁前遊図(抹消甚し)

墨画 竪二八・六種、横五八・五種

無款、無印

27) A 牽牛花図

墨画 竪六四・四種、横二八・八種

27) A に つ く

無款、無印

B 幽蕙図

墨画 竪六一・二種、横二九・三種

無款、無印

C 秋山落木図

墨画 竪八五・八種、横二八・八種

無款、無印